

コスモポリタンの近代における「共にあること」をめぐる理論社会学的考察：ウルリッヒ・ベックによる近代性の変遷に関する論考を通じて

著者名(日)	小野塚 和人
雑誌名	Global communication studies = グローバル・コミュニケーション研究
巻	1
ページ	155-174
発行年	2014-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00001207/

コスモポリタンの近代における
「共にあること」をめぐる理論社会学的考察
——ウルリッヒ・ベックによる近代性の変遷に
関する論考を通じて——

小野塚 和人

Taming the Uncontrollable Situation?:
Towards a Critical Re-examination of
Cosmopolitan Modernisation from
a Socio-spatial Perspective

ONOZUKA Kazuhito

What are the significance and problems in Ulrich Beck's concept of cosmopolitan modernisation? How do the particular characteristics of a society change in relation to the influx of 'outsiders' across the nation-state? This paper aims to develop a new theoretical approach to the concept of cosmopolitan modernisation by integrating a socio-spatial perspective that moves beyond nationalism and the nation-state. While Beck's argument has important implications for conceptualising the future of modern society by drawing attention to the ways that boundaries between insiders and outsiders are constantly being erased and redrawn, ultimately his model of cosmopolitan modernisation aims to locate alternative forms of 'with-ness' (or being together with fellow citizens) and thus shares basic traits of nationalism. To this end, this paper firstly examines Beck's concept of reflexive modernisation by focusing on the changes in territorial formations, individual conceptions, and the linear growth model. Secondly, this paper critiques Beck's concept through a specific focus on critical discussions of social space developed by Ghassan Hage, Uma Narayan and David Harvey. Building off of these insights, this article argues that socio-spatial conceptions that represent 'outsiders' need to be re-examined in relational terms. Specifically, this paper proposes Harvey's idea of relational space as a way of taking into account the shifting

and emergent boundaries of inside/outside and self/other that characterise the ‘uncontrollability’ of contemporary social space. It further suggests an integrated socio-spatial perspective for understanding the dynamic tensions within ‘cosmopolitan modernisation’.

キーワード：コスモポリタンの近代、再帰的近代、ウルリッヒ・ベック、空間、場所

1. 問題の所在

コスモポリタンの近代、あるいは、「第三の近代」に関する議論の特質と問題点は何か。国家を越えた関係性に起因する社会変動は、いかにして理論的に考察できるのか。国家を越えた関係性に起因する社会変動は、近代性の変遷と密接な関係を持っている。本稿は、社会学者ウルリッヒ・ベックによる「第二の近代」としての再帰的近代と、「第三の近代」としてのコスモポリタンの近代をめぐる考察の批判的検討を通じて、社会空間という観点から、近代性の変遷とコスモポリタンの近代の展開に関する議論の進展の一助とすることを目的とする。再帰的近代化をめぐる理論的論考は、ウルリッヒ・ベック、アンソニー・ギデンズらによって、1980年代から1990年代初頭にかけて展開されてきた。現在も、同様の問題関心に基づいた考察が、主にベックによって継承されている。ベックによる近代性の変化に関する理論的考察の問題意識は、社会の「普通の人々」の生活世界における「統御不能 (uncontrollable) な状態」の拡大と対処にある。

ベックによるコスモポリタン社会学とは、従来の社会学の枠組みでは捉えきれない事象の理解と、社会学の方法に関する問題提起をめぐる論考の蓄積のことを指す (Beck 2010, 2006, 2004a, 2004b, 2003, 2002 = 2008, 2002, 2001, 1999, 1998)¹⁾。こうした成果は新たな社会編成における社会変動を理解する上での方法的な思考実験である。ここで、コスモポリタンという語を用いるという理由で、かつての第二次大戦時における全体主義、帝国主義的拡張を引き合いに出して、思考停止や全否定に陥るのは早計である。既存の社会学の参照枠組みを超えた認識への方法的な問いは、かつての帝国主義的な拡張を正当化する言説とは峻別される。近年、コスモポリ

タンという語は、主に英語圏において、グローバリゼーションや多文化主義、ナショナリズムとして論じられてきた諸問題を包含し、代替する概念として用いられてきている。本稿では、コスモポリタンという語を、グローバル化が進展した後の、人々の間で「共にあること」の諸相を考察する概念として定義する。ここでのコスモポリタン社会学は方法的コスモポリタン社会学と言い換えて差し支えない。

近年、2000年代に入ってから、社会学領域でコスモポリタンを冠する論考が多数発表されてきている。代表的な成果として、Fine (2006) は、現在のコスモポリタニズムは、第二次大戦時の全体主義や帝国主義といった政治的な意味からは離脱し、様々な文脈と用法で用いられるようになっていくとする。Nava (2002) は、コスモポリタニズムを世界的な消費社会の拡大という文脈で使用している。また、Chernilo (2007) は、ジンメルやデュルケム、ウェーバーの時代から、社会学はコスモポリタンの、国民国家の枠にとらわれない社会研究を目指していたとするが、方法的な枠組みとしての国家を越えることは、現在でも困難であり続けているとする。政治学や政治思想領域の代表的な成果としては、Appiah (2006)、Archibugi and Held (1995) などがある。本稿は社会学領域に位置する。コスモポリタニズムに関する政治学、政治思想の領域で展開されている規範や価値といった問題は、社会学の考察対象としては必ずしも妥当しない。本稿では、社会学領域において考察を展開するベックの論考を対象に、その発展可能性を考察することにより、コスモポリタンの近代の社会学的論考の発展の一助とすることを目的とする。

ベックによる近代性の変遷に関する理論的考察は、ドイツをはじめとしたヨーロッパ社会から発信されている。従って、その議論を他地域に適用することには一定の留保が必要であろう。この点に関し、ベックのリスク社会論と個人化論における西洋中心主義、ドイツを対象にしていることへの文脈規定性、さらに、主体の認識についての批判的な考察には、Atkinson (2007)、Aven (2012)、Cottie (1998)、Elliott (2002)、Hanlon (2010) がある。しかし、2000年代に入ってからベックが考察を展開するコスモポリタンの近代に関しては批判的検討が不十分な状況にある。

本稿では以下の構成を取る。第一に、ベックの論考を、領域と個人に関する認識の変化、単線的な成長図式の問い直し、という観点から整理を行う。「第二の近代」としての再帰的近代が、「古典的なモデル」としての「第一の近代」と対比して、「普通の人々」の生活世界における「統御不能な状態」を拡大させたことを示す。第二に、再帰的近代化の深化で訪れる「第三の近代」としてのコスモポリタンの近代がいかなる特徴を持つかを考察する。第三に、ベックのコスモポリタンの近代をめぐる議論を、ガッサン・ハージ、ウマ・ナラヤン、デヴィッド・ハーヴェイらの論考に依拠し、社会空間という観点から批判的に検討する。

2. 「第二の近代」としての再帰的近代へと至る過程

2.1. 「第一の近代」における「古典的なモデル」の限界と「再帰的近代」としての「第二の近代」の進展

「古典的なモデル」としての「第一の近代」から転換した新たな時代状況は、「第二の近代」、再帰的近代化の時代として説明される。19世紀から開始された「第一の近代」化は、「因習に基づく伝統的な世界」という近代の原理とは「対極的なもの」を吸収し、「認識し、かつ支配しなければならない自然」の征服を背景として、推し進められた。とりわけ1960年代以降、近代化はその対極物として吸収すべき対象としての自然を包摂した結果、「産業社会の前提や機能原理と直面しなくならなくなった」とされる。近代化が近代化自身の存立原理に関与する段階に至ったという点で、再帰的近代化という名称が付与されている (Beck 1986=1998: 10; Beck et al. 1994)。

再帰的近代化の過程は、これまでの「古典的なモデル」が立脚していたとされる「第一の近代」との対比によって説明される。「第一の近代」の時代に構築された社会分析では、国民国家を軸とした、産業社会と階級社会に代表される社会的集合性 (social collectives) が説明の前提となった (Beck 2004a: 6)。その国民国家として想定される「社会」は、単一の合理性と単線的な成長図式によって特徴付けられる。それには、国内産業を支える規

制、階級文化、都市計画など様々な意味での「設計」、征服すべき自然の存在、が挙げられる。「第一の近代」は、一定の容器としての社会の中で、様々な役割期待と社会機能が明示的な形態を取って、認識することができた時代であると定義される。

こうした社会像は「古典的なモデル」とされ、1960年代以降の再帰的近代化の時代においては、その妥当性は消失しつつあるとされる。「第一の近代」において現実を認識するために考案された諸概念は、妥当性を一定程度残しながらも、「ゾンビ化」しているとする。再帰的近代化では、「古典的なモデル」の時代における社会変動の帰結が、意図せざる形で拡大し、「普通の人々」の生活に大規模化して訪れる。再帰的近代化の進展は、創造的破壊として新しい変化をもたらし、人々にも、これまでには考えられなかった生活様式、経済的機会を与えるものとして認識される（Beck et al. 1994: 2）。

その一方で、この変化は、自らの安定した基盤を不安定化させるようにも作用しうる。「第二の近代」における近代化の持つ負の結果は、欧米諸国、日本といった「先進」国の産業化と工業化の帰結として、温暖化、酸性雨、原発事故のリスクという環境問題の形態をとっている。産業化によってもたらされた「豊かな」生活は諸刃の剣であり、負の側面をも生み出してきた。「今日でもまだ読まれている19世紀の政治理論の文献」においても、近代化のこのような形での進展は予想されておらず、これまでの諸概念に基づく近代の理解が、近代化の深化の中で、困難になっているとする（Beck 1986 = 1998: 9-10）。

ベックは多様な事例を用いて、再帰的近代化における社会変動を「古典的なモデル」と対比しながら論じている。その多様な事例を整理するとすれば、ベックの議論は、第一には領域、第二には社会学的な個人の理解の仕方と方法、第三には単線的な成長図式の問い直し、という観点に要約されると筆者は考える。以下、本節では再帰的近代におけるこれらの変化を分析する。

2.2. 領域における変化

「古典的なモデル」が国境という明確な境界によって画定された国民社会ないし領域 (territory) を想定していたのに対し、再帰的近代化の時代においては、そうした領域に関する発想が転換を遂げる。第一に、領域という発想については、地理的な近接が社会的な親密さや統合をもたらすわけではないとしている (Beck 2004a: 23)。ベックは「驚くべき事態」として、通信技術と交通手段の発達を事例として挙げており、現在は「どこでもない場所でくつろぐことのできる」状態が生まれていて、人々はそうした状況を享受しているとする (Beck 2003: 27)。人と人との地理的な近接は必ずしも身体的、心情的な親密さを意味するものではなく、地理的に国境を隔てていても、親密な交流は可能になってきているとする。

第二に、権力の行使が領域を越えてなされていると指摘されている。ベックは、国家に加えて、多国籍企業を権力の行使主体として挙げている。ベックによれば、これまでの「古典的なモデル」としての「第一の近代」における権力の行使は、国家というコンテナの中に収まり、資本の活動も、国家や地域社会による徴税や規制という手段によって管理できたとする (Beck 2004a: 36)。しかし、規制緩和や、交通と通信技術の発達に伴う資本のフレキシビリティの回復によって、多国籍企業の活動は領域を越えて展開がなされている。多国籍企業の権力の行使形態の特徴は、「撤退する自由」にあるとする。多国籍企業によって現地社会がかく乱されることは、必ずしも望ましくないとしながらも、その「投資が来なければ、現地社会の経済状況はさらに悪化する」としている (Beck 2004a: 47)。この「撤退するという恫喝」が、地域経済にとっての脅威となり、「現地社会における政治的主体、諸組織を多国籍企業に従属させる」としている (Beck 2004a: 48)。このようにして脱領域化した権力は行使される。

第三に、人体や自然環境に有害な影響を与える化学物質によるリスクの存在により、これまでの領域の観念が無効になるとされる。リスクは、これまでの「古典的なモデル」としての「第一の近代」においては、個別的であり、計算可能なものであった。例えば、自動車事故といったような、これまでのリスクは原因と責任の所在が特定でき、その対処も個別の保険

制度によって対応することが可能であった。しかし、再帰的近代化の時代においては、例えば、化学物質汚染といったリスクは知らぬ間に大規模化し、突如として、階級や国家の枠を越えて、包括的に、平等に襲いかかる脅威として出現する（Beck 1986=1998）。コンテナとしての社会の境界を越えた人や化学物質の移動の中で、「統御不能な状態」が増大してくる。

2.3. 社会学的な個人の理解における変化

社会学的な個人の理解の変化は、領域をめぐる変化と同時に進行する。「古典的なモデル」としての「第一の近代」では、産業社会、階級社会といった社会的な集団性（social collectives）の構成要素としての個人が想定されてきた。「第二の近代」において社会的な集団性は変化を遂げ、「選択」という側面が各人の生に、より大きな影響力を持つようになったとされる。この過程は「個人化（individualisation）」として説明され、個人の「再埋め込みのされることのない脱埋め込み（disembedding without reembedding）」と定義される（Beck 2004a: 63; Beck and Beck-Gernsheim 2002）。この「個人化」は、人々が啓蒙されて、より自らの生に対して高い意識を持つということでは必ずしもない。ベックは、社会的な紐帯の融解とともに進行する「個人化」が「全速力で回転（進展）」（括弧内筆者）していると指摘する（Beck 1999: 26; 2004a; 2004b）。そして、「個人化」のなかで、社会問題が個人の問題として扱われるようになる（Beck 1986=1998: 193）。「個人化」は、以下の二つの領野において、典型的に現れるものとして説明されている。

第一の事例は、家族である。「古典的なモデル」としての「第一の近代」においては、家族は核家族・大家族の形態をとり、異性愛に基づき、子どもの存在によって特徴付けられる。再帰的近代化の深化によって、家族形態が多様化し、同性婚、事実婚、子どものいないカップルの家庭が増大すると説明される。この家庭や男女の関係性の変化を最も強力に推し進めたのは「階級と性別を超えた教育機会の拡大」であるとベックは説明する。こうした状況下において、ベックにとって家族を計測する唯一の単位は、「誰と一緒に洗濯をするか」となる（Beck 2004a, 2004b, 1986=1998;

Beck and Beck-Gernsheim 2002)。

第二の事例は、失業である。ベックによれば、失業は、「古典的なモデル」としての「第一の近代」においては、階級的・集团的運命として現れるものであった。「第一の近代」において、職業に関連した資格を持っていれば、その後の失業を恐れる必要は必ずしもなかったとする。しかし、現在の失業は、大量でありながら個人のレベルで経験されるところに、これまでの集団で降りかかった失業とは異なった特質があるとベックは述べる。再帰的近代化の進展によって、大量失業が恒常化すると共に、失業と雇用の「グレーゾーン」に存在する労働力が急増するとしている (Beck 1986 = 1998: 166,177; 2004a)。

2.4. 単線的な成長図式の問い直し

ベックの列挙する様々な事例は、単線的な成長図式の問い直しという観点に集約されている。このことは、ベックのいうリスクをめぐる論考に明示的に現れている。これまでも取り上げてきた「古典的なモデル」について、ベックは「単線的な社会発展という図式は、社会科学の核であり続けてきた」とする。そして、「近代化の帰結は誰も予想できない。このこと自体は、我々の概念図式に組み入れる必要がある」としている (Beck 2004a: 24; Beck et al. 2004)。「古典的なモデル」が通用したとされる産業社会では、「富の生産の『論理』が危険(リスク)の生産の『論理』を圧する」(括弧内筆者)とされた。それに対して、「第二の近代」においては、「この関係が逆転」とされる。近代化の過程が「再帰的」ないし「自己内省的段階」に至ることによって、「生産力が悪」とみなされるようになる (Beck 1986 = 1998: 161-3)。「古典的なモデル」においてその推進力を下支えしてきた科学の妥当性が、再帰的近代化の過程で疑問に付されるようになる。再帰的近代化のもとでリスクは、人々が全く予期せず、関知しないところ、すなわち、「猫の手のひら (cats' paw)」のようなところで進展し、突如として大規模に襲いかかるとベックは説明する (Beck et al. 1994: 3)。「第二の近代」では、人々にとっての様々な問題が社会集団といった媒介を経ずにもたらされ、「統御不能な状態」が「普通の人々」の生活世界にお

コスモポリタンの近代における「共にあること」をめぐる理論社会学的考察
いてより高まっていく。

3. 「第三の近代」としてのコスモポリタンの近代

再帰的近代化が深化し、既成概念の射程を超える社会理解が求められる時代は、「第三の近代」、あるいは、コスモポリタンの近代として、考察が展開される。この「第三の近代」をめぐる論考は、次節にも示すように、さまざまな問題点を抱えてはいるものの、その試みは評価されるべきである。「社会」や「個人」という概念は、国民国家の枠を出た途端、把握が困難になる。国家を越えた空間で用いられるのは、例えば、「自然権」や「人権」といった、極めて抽象的な概念である（山岡 2007: 234）。他方で、国民国家に属しながら存在する人々には、所属国家からの公的扶助を受ける権利、納税義務など、さまざまなネットワークの中で個人の属性が認識される。これまで考察してきた再帰的近代化の時代において、国民国家の枠が仮に限界を迎えているのだとしたら、どのような社会編成が地球上で展開しているのか。そうした社会編成をどのように社会的に考察していけるのか。ベックの議論はこの論点を考察し、人類のこれまでの社会に関する想像力を越えようとしている点で、大きな意義を持っている。まず、コスモポリタンの近代における社会学について、ベックは以下のように述べている：

古典的なモデルの有する説得力は、徐々に弱まっています。グローバル化によって作られた世界は、普遍主義的な見方が幅を利かせた 19 世紀のものとは大きく異なっています。古典的な社会学は、境界があって、対立項のある社会像を想定し、それぞれのコンテナの中に、文化、経済、独自のアイデンティティが存在し、そのコンテナの中での人々の運命は統御できるものだと想定してきました。今求められるのは、普遍主義的な見方 (universal perspective) から、コスモポリタンの見方 (cosmopolitan perspective) への転換です。〈中略〉コスモポリタン社会学においては、ものの見方の根本的な変化を導入しなくてはなりません。コスモポリタン社会学では、対話的な想像力と研究が必

要であるとともに、概念と組織をめぐる想定を再考し、再構成を試みる必要があります。そして、国家の存在を思考と観察における前提とすることから脱する必要があります。Beck (2004a: 16 筆者訳)

コスモポリタン社会学においては、「近代性の原則のメタ統合 (meta-integration) が達成されなければならない。従って、私はこのことを再帰的コスモポリタン化と呼びたい」としている (Beck 2004b: 447)。再帰的近代化の発展的な形態として、コスモポリタンの近代は存在する。従って、この「コスモポリタン社会学」として説明されている箇所は、「再帰的近代化が深化した後の社会学」と読み替えて差し支えない。

「第三の近代」ないしコスモポリタンの近代という概念は、これまでに存在した様々な社会的境界が融解し、「統御不能なもの」が増大するなかで、当該社会に出現する多国籍企業や移民といった「異質な他者」の到来を前向きに認識し、「他者の他者性に対して、自分はどのような態度を取るのか」を指し示す表現として用いられる (Beck 2002=2008: 64)。Beck (2002=2008: 342) が示すように、これまでの「第一の近代」と「第二の近代」では、「他者の他者性」は否定され、「国家間、民族間、宗教間の対話というアイデンティティの形成力、つまり (しばしば苦痛や逆説に満ちた) 対話的想像力を無限に失って」きたとする (括弧内原文)。コスモポリタンの近代に関するベックの思考は、以下に集約される：

コスモポリタニズムの核心は他者の他者性を認めることにある。〈中略〉それは西洋の自民族中心的な普遍主義を、相対主義の罠に陥ることなく、克服されるべきアナクロニズムとして提示することでもある。コスモポリタニズムは右翼から左翼に及ぶ自民族中心主義とナショナリズムに対する解毒剤である。自民族中心主義と排外主義という醜い世界に対抗して獲得された洞察は、コスモポリタンの共通感覚への最初の一步になるかもしれない²⁾。(Beck 2002=2008: 344-5、同様の記述に Beck 2002: 46)

このコスモポリタンという語をあえてベックが用いる理由は、「他者との対話」という点に存在する。ここでは、「私たち」と「他者」という区分はもはや存在論的に条件づけられないとされる。ここで、コスモポリタニズムは、「A か B か (either/or)」ではなく、「A も B も (both/and, this-as-well-as-that)」を原理とする (Beck 2002=2008: 55; 2001: 34)。これまで個人は、民族的・政治的単位の中でしか物事を考えられなかったとしつつ、ベックは、「ヨーロッパ対野蛮な他者という二項対立による線ひきは植民地主義、自民族中心的普遍主義、伝統と近代、さらに多文化主義や『グローバルな対話』にまで及んでいる」とし、「排他的な区分」に基づいた思考形式は、「同じである地平線」において包摂的区分の思考形式に取って代わられるとする (Beck 2003: 17; 2004b: 438)。コスモポリタニズムにおいては、「他者あるいは異質なものが、他者性と異質性を失い、包摂され、獲得される。そこにおいては、「私たちと他者という区分が止揚され、全員のために二つの場所」ができ、民族的・政治的単位の「境界線を越えて」、互いに、「対話」に入るとされる (Beck 2002=2008: 55, 57)。

ベックにおけるコスモポリタンの近代は、前節で述べた「個人化」を前提とする。あらゆる既存の枠組みが限界を迎え、「個人化」が進行するなかで、人々は個人単位で世界と対峙する。この状況下で、ベックにとって、人々を連帯させる唯一の鍵は、「リスクあるいは全世界的な恐怖と不安」となる (Beck 2006: 35)。「善いもの (good)」の分配ではなく、「悪いもの (bad)」の分配に対して、全世界は共同して立ち向かい、連帯しなくてはならないとされる。これまでの多文化主義が集合的なカテゴリと同質的な集団を前提とし、その集団間の線引きによって個人を認識してきた一方で、コスモポリタンの近代は集団ではなく、一個人によって担われる (Beck 2004b: 446)。ベックからすれば、「第二の近代」における「個人化」はコスモポリタンの近代社会の重要な素地になりうるとする。「第三の近代」としてのコスモポリタンの近代では、国民国家とは異なった参照枠組みが有用になる。

コスモポリタンの近代という新たな社会状況は、現在、日常生活において体験できているとする。ここでベックが用いる事例は、食物である。

ベックは、「食物は世界の様々なところから到来して、既に団結 (unite) している」とした上で、以下のように述べている:

国家を中心とした近代性では、コスモポリタニズムは知的に、観念的にしか認識できず、生活経験の中で感じ取ることはできなかった。そして、ナショナリズムこそが、対照的に、人々の心情をつかんでいたのである。この理念と心情の二元論は第二の近代以降では覆される。日常生活でコスモポリタニズムは当たり前の方法 (banal ways) で経験される。しかし、ナショナリズムの時代における概念は、人々の心情、そして、社会科学における議論においても残存し続ける。(Beck 2006: 19 筆者訳)

「第三の近代」としてのコスモポリタンの近代の発展に関する道筋は、楽観的に閉じられている。ベックは「第三の近代」では、これまでの経済成長と近代化の図式が限界を迎えるとして、ベーシックインカム (すべての市民に対する最低所得保障) の導入をめぐる政策提言を行っていたりもする (Beck 1999: 26)。「第一の近代」からの変遷の図式、そして、「第三の近代」は、それぞれの場所において、異なった現出形態を取りうる。しかし、新たな社会編成が到来する現在において、社会学の認識は転換を迎えているとして、論は閉じられている。

4. コスモポリタンの近代の持つ陥穽と発展可能性

「第三の近代」としてのコスモポリタンの近代の議論は、いかなる観点からの発展が可能か。本節では、ベックの議論に対する問題点を指摘するとともに、コスモポリタンの近代に関する論考は、社会空間をめぐる認識から考察を発展できることを提案したい。近代社会としての歴史が浅い国家や場所では、理論に近い形で社会変容が生じる場合があり、社会理論の有用性を検証したり、発展を試みる際に、有効であることがある。特に、コスモポリタンの近代の発展的な考察には、オーストラリアやカナダといった、近代社会としての歴史が比較的浅く、移民が大きな役割を果たし

ている多文化主義社会を参照することが、有用な視座をもたらす。

第一に、コスモポリタンの近代の議論の問題点は、Hage (1998) の考察対象であるオーストラリア（以下、豪州とする）におけるヨーロッパ系住民によるナショナリズムと差異がほとんど存在しない点にある。Hage (1998) は、豪州社会南部の都市シドニーを題材としながら、豪州のアジア人とヨーロッパ系住民との関係性に起因するナショナリズムの現出を論じている。現地の「主流」とされる人々にとって、国家という社会空間は自らを包みこむものとして経験される。それと同時に、「これが私の国家だ (this is my nation)」として自らが国家の上に君臨するかのような図式と経験こそが、豪州のナショナリズムの骨格をなしているとする (Hage 2009, 1998)。上述の近代性の変遷のなかでの「統御不能な状態」の増大において、ナショナリズムにおける「人々が共にあること (with-ness)」という意識が衰退しているとハージは指摘する。そのなかで、当該社会の「主流」とされる人々が、「野蛮な人々」を創り出し、それに対比する形で、「我々」という「共にあるという意識 (with-ness)」が形成されるとする (Hage 2009)。この状況下で「野蛮な人々」を含む「手なづけられていない自然」を飼い慣らすことが「我々の使命」であるとする「未完の入植社会型のナショナリズムの言説 (a nationalism of an unachieved settler society)」が、豪州に限らず、カナダや米国といった国々で見られていると Hage (2009) は指摘する。

近代社会としての豪州社会は、入植から約 200 年余りの短い歴史を有する。建国当初からイギリス的な社会を志向しながらも、地球の反対側に位置する「本国」からの労働力確保は容易には進まず、現在に至るまで様々な方策を講じてきている。豪州社会における日本の約 20 倍を有する広大な国土を開拓し、建設・維持するためには、近隣のアジア太平洋地域の労働力に一定程度頼らざるを得なかった。豪州社会は、常に地球の裏側に位置する「本国」と、「異質」な文化を持つ隣接地域との相克の中で存立してきた。1970 年代に本格化した多文化主義社会化から現在に至るまで、アジアからの移民が急速に増加し、社会的なプレゼンスを増していく中で、ヨーロッパ系豪州住民の間で、豪州という社会空間に対する意識が変容を

遂げてきている。

豪州社会には、北からのアジアからの脅威に常にさらされているという「心理地理的な不安」が存在し続けており、ヨーロッパ系豪州住民の国・領土・領域に対する意識は定期的にアジアへの反動を発生させている (Hage 2003; Walker 2002)。ヨーロッパ系豪州住民による「異質な他者」の到来への反動は「自らがこの国の管理者である」とする意識の喪失にも起因しているとする。Ang (2001) も指摘するように、多文化主義者 (multiculturalist) がアジアを論じる際には、アジアとの近接性という地理 (geography) を問題にする。他方で、保守派とされる人々がアジアを論じる際には、イギリスやヨーロッパとの関係性という歴史 (history, heritage) を問題にする。しかし、多文化主義者が保守派かを問わず、自らが国家をコントロールし、管理できるとしている点では共通する。Hage (2009) からすれば、コスモポリタンという概念も、別の方法で「共にあること (withness)」を探る試みであるとして批判される。

第二に、ベックが食物は世界各地から到来し、ひとつの皿の上で調和をなしていることを指し、「食べ物はずでに団結している (our food is already united)」という表現を用いるように、食べ物を用いて、それを人に敷衍しながら、コスモポリタンの社会編成を述べていることに対しては、Narayan (2004) による考察がその限界を指摘するのに役に立つ。Narayan (2004) はイギリス社会におけるインド料理を例にとって、「カレー」とされている商品が、インドとその周辺諸国では実際には「カレー」とは呼ばれてはおらず、多様な名称を有しているとする。このように食物の呼称を単純化することは、「異質な他者」の多様性と差異を消去し、単純化して本国の社会に摂取し、包摂することと同等であるとする (Narayan 2004: 207)。Narayan (2004: 220) は、「移民も、その持ち込むエスニック料理も、ホスト社会によって、適応され、同化され、選抜される過程を不可分に経ざるを得ない」としている。

コスモポリタンの時代になっても、「エスニック」な人々は「エスニック」であり続け、ここに現地社会において他者を自ら手なづける活動や態度があるとしている (Narayan 2004: 223)。すなわち、「エスニック料理を

食べる、〈中略〉そうした人々は『エキゾチック』な食事について皮相な関心しか示さず、他者の食を自分たちの威信や洗練を高めるために利用し、そうしたエスニック料理が食べられている文化的コンテクストに、本当に興味を持ったり配慮したりすることのないままに、『エスニックを食べて』いる」とする。そして、「主流派食いしん坊たちが特権的消費者の地位」にとどまり、「エスニック料理」が生産される (Narayan 2004: 223)。そして、「エスニック料理には低料金と低いチップが求められるなど、消費されるコンテクストをしばしば形作る、構造的な不平等と物質的窮乏から利益を得ている」という事実があるとする (Narayan 2004: 228)。こうした論考から導かれるのは、コスモポリタンの近代においても、他者は他者のままで存在し続けるという点である。コスモポリタンの社会編成が到来したとしても、そうした他者性は融合することなく残存し、そこには、自称コスモポリタンな人々の間での「共にあること (with-ness)」の取り戻しが行われていると解釈できる。

このことは、他者との融和と共存を目指し、みなが同胞であるはずのベックのコスモポリタン社会学にも、「敵」が存在する点に表現されている。リスクに対して連帯しない者、あるいは、西欧の秩序に挑戦を仕掛けてくる者は「敵」となる。ここにおいて、国境を越えて到来する「異質な他者」は潜在的なリスクへと転換する。主に1990年代にいたるまでのベックの諸論考をレビューすると、それまでベックがリスクとして定義していたものには、産業化と近代化によってもたらされる環境問題に代表される人類への大規模な化学的なリスクに集約されていた。しかし、2000年代に入り、いわゆる9.11を経て、ベックの言う「世界的なリスク (world risk)」のなかに、「テロリストからの攻撃 (terrorist attack)」という項目が付け加わった (Beck 2002: 43; Beck et al. 2003: 10-1; Beck and Sznaider 2006: 11)。ベックによれば、テロリストと名指される人々からの攻撃は「常に悪」であり、「正当化できない (unjustifiable)」とされる。確かに、ベックは「コスモポリタニズム」の名の下になされてきた過去の数々の軍事的行動を批判はする (Beck 1998: 29)。しかし、世界規模で拡大するリスクの時代において、世界が共同して立ち向かうためには、こうした人々に対する「構造

調整」のような介入も容認される (Beck 2002: 43)。

この点に関して、デヴィッド・ハーヴェイはベックに代表されるコスモポリタンの近代の論考全般に対して、その最大の問題は、場所と空間に関する単一の理論的措置が支配しており、特に、場所の排斥的なあり方を乗り越えていない点にあると指摘する。ハーヴェイは場所と空間のあり方という地理的な前提を問い直し、解放していくことで新たな社会空間のあり方 (alternative spatial formation) を見出すことはできるとする (Harvey 2009: 16, 280)。現時点でハーヴェイはコスモポリタン社会学の展開可能性は、場所にあるとしている。場所は集合的記憶の焦点であり、場所をめぐる表象は、人々に幻想、欲望、恐怖といった感情を与え、それを実際の行動にも反映させる (Harvey 2009: 175; 2000; 1996)。ハーヴェイからすれば、場所における記憶は象徴的な意味を持つ。「未来への希望は、過去と記憶から生まれる」とされ、その「想像力は人々を過去と現実から解放し、未来へと直面」させる。そして、「あまたの人々の欲望が渦巻く中で、想像され、創造された場所は、政治を行っていくうえでの中核的な役割を果たしてき」たとする (Harvey 2009: 179)。

また、ハーヴェイは、ライブニッツによる相関的な空間論を取り上げてもいる。しかし、ハーヴェイは必ずしも説得力のある形で、ライブニッツの思想を展開できているわけではない。また、新たな空間編成としての相関的空間の認識についても言及のみで、その論考を展開してはいない。新たな空間編成や場所のあり方を考えるには、人類のこれまでの知的認識、想像力を超えた思考が必要であり、その先駆的な実験が Harvey (2009, 1996) で試みられている。「共にあること (with-ness)」をめぐる諸問題を克服できるのだとすれば、こうした空間や場所の認識を刷新できた後となるであろう。

しかし、このようなベックに対するハーヴェイの批判にも限界がある。まず、場所が世界規模の社会変動によって、その変容を迫られていることは、Harvey (1990; 1989) の主題のひとつにもなっている。ベックも指摘するように、人々は「どこでもないところ」で快適さを感じ取れるようになっている。ここで、既存の場所をめぐる定義を持ち出し、そこに可能性

を求めることには限界があるだろう。また、相関的な空間のあり方に関する論考にも展開の余地を残している。Hage (2009; 1998) や Narayan (2004) も、ベックのいうコスモポリタンの近代を批判しながらも、その批判の後に何がありうるかについては、言及が一切ない。もちろん、このような討議的な形態をとった議論は学問の発展において不可欠である。しかし、こうした論争において、その先にある学問的な像を発展させていく社会的責任は、各論者にも存在すると考える。

5. 結論

本稿では、ウルリッヒ・ベックによる近代性の展開をめぐる論考を批判的に検討することにより、社会空間という観点からコスモポリタンの近代に関する議論の発展可能性を指摘した。本稿では、再帰的近代化を経て、コスモポリタンの近代へと至るなかで、「普通の人々」の生活世界における「統御不能な状態」が拡大することを示した。近代性の変遷によって発生する変化は、領域、個人の理解、単線的な成長図式の問い直し、という三つの分野において現れる。こうした領野における社会変動を経て、現在では、「第三の近代」、コスモポリタンの近代ともいべき時代に突入している。コスモポリタンという語は、多国籍企業や移民、越境する風物の到来のなかで「普通の人々」にとっての「統御不能な状態」が増大する中での社会編成を考察する概念である。

ベックの試みは、近代性の新たな展開を積極的かつ建設的に考察したものであり、その意義は大きい。しかし、この議論に対しては、問題点が存在し、克服すべき点があることを示した。他者を食物にたとえるような思考は、他者を客体として扱い続けることを意味し、ハージのいう、異質な他者と管理する主体としての我々、という図式と変わるところがない。本稿では、こうした理論的な陥穽を打破する示唆を与えている論考として、ハーヴェイによる空間と場所をめぐる考察を取り上げた。ハーヴェイは、こうした問題は空間と場所に対する認識を捉え直していないからであるとしているが、そこから先への論考は説得力を持ってなされていない状況にある。

ベックによる近代性の変遷をめぐる議論を踏まえて、領域を越えた社会関係から生起する社会空間を実証的に考察し、そこから理論的に還元することが、コスモポリタンの近代の論考の進展において求められる。近代性の変遷の中での社会変動を現場から継続して考察し、進展させることが、今後の研究課題となる。

注

- 1) コスモポリタンという語を他の語彙で表現することは可能ではある。Taylor and Lang (2004) は、都市と地域を題材とする研究において、いかに多くの語彙が量産されたか、それにもかかわらず、方法的な観点がいかに深められていないかを図示しながら批判している。レトリカルな語彙の追求だけに終わり、その語彙が新たな方法論的な認識をもたらすものでなければ意味はないとしている。社会の終焉、転換、ないし再編といった命題は、ポストモダニズムといったさまざまな立場に立つ論者達が表明してきた論点と類似する。再帰的近代、「第二の近代」とも呼ばれる概念の指し示す事象には、多様なラベリングがなされてきた。例えば、Bauman (2000) はリキッドモダニティ、Lyotard (1984) はポストモダニティ、Waters et al. (1992) はポストインダストリアリズム、といった概念を提唱してきた。さまざまな「パラダイム」が存在する中で、ベックの社会理論の意義は、単に「終焉」を指摘するだけに止まることなく、その次に何がありうるかを積極的に考えている点にある。Beck (2004a: 25-7, 29) は、自らをポストモダニズムの論者とは異なるとし、「ポストモダン論者は『何々がない』というだけで、何も明らかにしていない (deconstruction without reconstruction)」とする言明をしており、近代性 (modernity) は終焉してはならず、ラディカル化しているものであり、その概念の「再建と再構築」の努力の必要性を強調している。
- 2) Beck (2002=2008) では、コスモポリタニズムではなく、コスモポリタン主義と訳されている。この点に関し、筆者が一部修正を加えた。

参考文献

- 山岡健次郎. (2007). 「国民と難民の出会いところ」『一橋社会科学』(3) 231-55 頁.
- Ang, Ien. (2001). *On Not Speaking Chinese*. London: Routledge.
- Appiah, Kwame Anthony. (2006). *Cosmopolitanism*. New York: W. W. Norton & Company.
- Archibugi, Daniele. and Held, David. (Ed). (1995). *Cosmopolitan Democracy: An Agenda for a New World Order*. Cambridge, UK: Polity Press.
- Atkinson, Will. (2007). 'Beck, Individualization and the Death of Class: A Critique' in

- The British Journal of Sociology* 58 (3) 349–66.
- Aven, Terje. (2012). ‘On the Critique of Beck’s View on Risk and Risk Analysis’ in *Safety Science* (50) 1043–48.
- Bauman, Zygmunt. (2000). *Liquid Modernity*. Cambridge, UK: Polity Press.
- Beck, Ulrich. (2010). ‘Remapping Social Inequalities in an Age of Climate Change: For a Cosmopolitan Renewal of Sociology’ in *Global Networks* 10 (2) 165–81.
- . (2006). *The Cosmopolitan Vision*. Cambridge, UK: Polity Press.
- . (2004a). *Conversations with Ulrich Beck*. Cambridge, UK: Polity Press.
- . (2004b). “The Truth of Others”. in *Common Knowledge*. 10 (3) 430–49.
- . (2003). “Rooted Cosmopolitanism: Emerging from a Rivalry of Distinction in Global America”. in Beck, Ulrich., Sznaider, Natan. and Winter, Rainer. (Eds.). *Global America?: The Cultural Consequences of Globalization* (pp. 15–29). Liverpool: Liverpool University Press.
- . (2002). *Macht und Gegenmacht im Globalen Zeitalter: Neue Weltpolitische Ökonomie*. Frankfurt am Main : Suhrkamp. (= 2008. 島村賢一訳『ナショナリズムの超克——グローバル時代の世界政治経済学——』NTT出版.)
- . (2002). “The Terrorist Threat: World Risk Society Revisited”. in *Theory, Culture & Society*. 19 (4) 39–55.
- . (2001). “The Fight for a Cosmopolitan Future”. in *New Statesman*. 2001年11月5日号. 33–4.
- . (1999). “Beyond the Nation State”. in *New Statesman*. 12 (584). 25–7.
- . (1998). “The Cosmopolitan Manifesto”. in *New Statesman*. 1998年3月20日号. 28–30.
- . (1986). *Rikogesellschaft*. Frankfurt: Suhrkamp Verlag. (= 1998. 東廉、伊藤美登里訳『危険社会——新しい近代への道——』法政大学出版局)
- Beck, Ulrich. and Beck-Gernsheim, Elisabeth. (2002). *Individualization: Institutionalized Individualism and its Social and Political Consequences*. London: Sage Publications.
- Beck, Ulrich., Giddens, Anthony. and Lash, Scott. (1994). *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*. Cambridge, UK: Polity Press.
- Beck, Ulrich., Bonss, Wolfgang. and Lau, Christoph. (2003). “The Theory of Reflexive Modernization: Problematic, Hypotheses and Research Programme”. in *Theory, Culture & Society*. 20 (2) 1–33.
- Beck, Ulrich. and Sznaider, Natan. (2006). “Unpacking Cosmopolitanism for the Social Sciences: A Research Agenda”. in *British Journal of Sociology*. 57 (1) 1–23.
- Beck, Ulrich., Sznaider, Nathan. and Winter, Rainer. (2004). *Global America? The*

- Cultural Consequences of Globalization*. Liverpool: Liverpool University Press.
- Chernilo, Daniel. (2007). "A Quest for Universalism: Re-assessing the Nature of Classical Social Theory's Cosmopolitanism". in *European Journal of Social Theory*. 10 (1) 17-35.
- Cottie, Simon. (1998). "Ulrich Beck, 'Risk Society' and the Media: A Catastrophic View?" in *European Journal of Communication*. 13 (1) 5-32.
- Elliott, Anthony. (2002). "Beck's Sociology of Risk: A Critical Assessment" in *Sociology* 36 (2) 293-315.
- Fine, Robert. (2006). *Cosmopolitanism*. London: Routledge.
- Hage, Ghassan. (2009). "Racism: A Debate" in *The Fourth Ideas and Society Lecture*. La Trobe University URL: <http://www.latrobe.edu.au/news/ideas-and-society/racism-a-debate> (アクセス日: 2013年9月29日).
- . (2003). *Against Paranoid Nationalism*. Annandale: Pluto Press.
- . (1998). *White Nation*. Annandale: Pluto Press.
- Hanlon, Gerald. (2010). "Knowledge, Risk and Beck: Misconceptions of Expertise and Risk" in *Critical Perspectives on Accounting* (21) 211-20.
- Harvey, David. (2009). *Cosmopolitanism and the Geographies of Freedom*. New York: Columbia University Press.
- . (2000). *Spaces of Hope*. Berkeley: California University Press.
- . (1996). *Justice, Nature and the Geography of Difference*. Oxford: Blackwell.
- . (1990). *The Condition of Postmodernity: An Enquiry into the Origins of Cultural Change*. Oxford: Blackwell.
- . (1989). "From Managerialism to Entrepreneurialism: The Transformation in Urban Governance in Late Capitalism". in *Geografiska Annaler*. 71 (B) 3-17.
- Lyotard, Jean-Francois. (1984). *Postmodern Condition: A Report on Knowledge*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Narrayan, Uma. (2004) 「文化を食べる: インド料理をめぐる食文化の取り込みとアイデンティティ」 テッサ・モーリス＝スズキ、吉見俊哉編『グローバリゼーションの文化政治』平凡社。204-41頁。
- Nava, Mica. (2002). "Cosmopolitan Modernity: Everyday Imaginaries and the Register of Difference". in *Theory, Culture & Society*. 19 (1-2) 81-99.
- Taylor, P. J. and Lang, R. E. (2004). "The Shock of the New: 100 Concepts Describing Recent Urban Change" in *Environment and Planning A*. (36) 951-8.
- Walker, David. 2002. "Survivalist Anxieties: Australian Responses to Asia, 1890s to the Present" in *Australian Historical Studies*. 33 (120) 319-330.
- Waters, Malcolm., Crook, Stephen. and Pakulski, Jan. (1992). *Postmodernization: Change in Advanced Society*. London: Sage Publications.